下河辺長流の「三十六人歌合」と『釈教歌仙』

――金光図書館神徳書院文庫蔵『哥書』における独自撰歌について――

本多潤子

はじめに

金光図書館神徳書院文庫に、下河辺長流（一六二七？――八六）自筆とされる『哥書』［A 911-130］が伝来する。この『哥書』は『小倉山荘色紙和歌』、四種の『三十六歌仙』や『時代不同歌合』を書写したものである。特に、公任撰の『三十六人撰』の三十六人から派生した、異種三十六歌仙が複数採られている点が特徴的である。その所収作品には、この『哥書』にしかみられない独自の撰歌が採られているものもあり、本文系統には検討の余地がある。また、『哥書』が書写されたと考えられる十七世紀後半は、堂上において飛鳥井雅章編『数量和歌集』『歌書集成』や中院通茂撰『中院三燈集』といった、異種三十六歌仙を複数収録する歌集が多く編纂された時代でもある。

本稿では、『哥書』所収名数秀歌撰のうちの、「三十六人哥合僧栄海撰」を中心に、同時代の堂上、地下の諸本との本文の比較を通して、その特徴を探りたい。

一　下河辺長流筆『哥書』について

金光図書館神徳書院文庫所蔵『哥書』（以下、金光本と称す）は、箱入りで半紙本（縦十七・二糎×横十二・二糎）一冊、四針眼訂、表紙は浅黄色の無紋紙で、題簽はなく、「下河辺長流／哥書」と左上に直書されている。遊紙は無く全百二丁の写本で、巻首に「小倉山荘色紙和歌」とあり、以下七種の作品が収録されている。蔵書印は一丁目に「金光図書館蔵」印がみられる。目録はなく、十行、和歌一行書で、その収録作品の題は、

小倉山荘色紙和歌（一丁から十一丁表）
三十六人哥合公任卿撰（十一丁裏から十五丁表）
中古三十六人哥合（十五丁表から十八丁裏）
女房三十六人哥合（十九丁表から二十二丁裏）

三十六人哥合僧栄海撰（二十二丁裏から二十六丁表）
時代不同歌合後鳥羽院勅撰（二十六丁裏から五十六丁裏）
新時代不同歌合後花園院勅撰（五十六丁裏から百二丁裏）

である。収録作品は皆一首本であり、四種の「三十六人哥合」には、独自撰歌がみられる。そして裏見返しに「長流（押）」と署名がある。「長流」という署名の筆跡は、駒澤大学図書館蔵『晩花集』[1]の長流自著と似通う。

書写者とされる下河辺長流は、契沖と親交の深い万葉学者として名高く、森銑三氏の「下河辺長流」[2]にその略歴・年譜が示されている。それによると、「長流」という名を名乗るのは、難波に隠棲した後のことで、

万治二年、その三十五歳の頃に成つた『歌仙抄』並びに『萬葉集名寄』には、「下河邊氏注」「下河邊氏某撰」とあつて、まだ長流の名は用ひられてゐない。その後寛文七年、長流四十三の歳に成つた『二聖倭歌注』に至つて、初めて「長流撰」とせられてゐるのを見る。長流の名は大体この頃から称したのであらう。

とある。よって、金光本の成立は寛文七年以降と考えられる。なお、『契沖全集　附長流全集』[3]には、長流自筆とされる「中川の水」が所収されているが、そこには、

寛文四年八月廿日　　長流子

とあり、寛文年間前半から「長流」と称していたと考えられる。

長流の自筆本は今井似閑（一六五七―一七二三）の蔵書を収めた上賀茂神社三手文庫を中心に複数現存している。現存諸本のなかで金光本と筆跡が最も似通っているのは、延宝年間（一六七三―八一）に書写されたとする駒澤大学付属図書館所蔵長流自筆『晩花集』であるため、その頃の筆とも考えられるが定かではない。

二　「三十六人哥合僧栄海撰」翻刻

この金光本に収録されている五作品目の「三十六人歌合」は、「栄海撰」とされ、公任撰の三十六人とは異なる人撰がなされている。次に「三十六人歌合僧栄海撰」部分の翻刻を示す。

三十六人歌合僧栄海撰

左　　達磨和尚
いかるかやとみの小川の絶はこそわかおほきみの御名をわすれめ

右　　聖徳太子
しなてるや片岡山のいひにうへてふせる旅人あはれおやなし

左　　僧正菩提
かひらえにともに契りしかひありて文殊の御かほいまみつる哉
右　　大僧正行基
霊山の釈迦の御前に契りてし真如朽せす逢みつる哉
左　　傳教大師
阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我たつ杣に冥加あらせ給へ
右　　弘法大師
法性の無漏戸ときけは我すめは有為の浪風たゝぬ日そなき
左　　慈覚大師
大かたの過る月日をなかめしは我身に年のつもるなりけり
右　　智證大師
法の舟さしてゆく身はもろ〳〵の神も佛も我をみそなへ
左　　沙弥満誓
世中を何にたとへん朝ほらけこきゆくふねの跡のしら浪
右　　玄賓僧都
三輪河の清きなかれにすゝきてし衣のそてをまたやけかさん
左　　僧正遍昭
いそのかみふるの山辺のさくら花うへけん時をしる人そなき
右　　喜撰法師
我庵はみやこのたつみしかそすむ世をうし山と人はいふ也
左　　僧正聖宝
はなのなかめにあくやとて分行はこゝろそいとゝちりぬへらなる
右　　素性法師
我のみやあはれとおもはんきり〳〵すなく夕かけの大和なてしこ
左　　空也上人
うろの身は草葉にかゝる露なるをやかて蓮にやとらさりけん
右　　日蔵上人
寂寞のこけの岩戸のしつけきになみたの雨のふらぬ日そなき
左　　蟬丸
秋かせになひく浅ちの末ことにをくしら露のあはれ世中
右　　性空上人
千年ふる松たに朽る世中にけふともしらてたてる我哉
左　　小僧都源信
われたにもまつ極楽に生れなはしるもしらぬもみなむかへてん
右　　恵慶法師
天のはら空さへさえやわたるらむ氷とみゆる冬の夜の月
左　　能因法師
夕されはしほ風こへてみちのくの野田の玉河千鳥なく也
右　　良暹法師
たつねつる花と我身もおとろへて後のはるともえこそ契らね
左　　法師永観
みな人をわたさんと思ふ心こそ極楽へゆくしるへなりけれ

右　　登蓮法師
世中の人のこゝろのうき雲にそらかくれする在明の月
左　　大僧正行尊
草の庵を何露けしと思ひけんもらぬ岩屋も袖はぬれけり
右　　僧正永縁
きくたひにめつらしけれは郭公いつも初音の心地こそすれ
左　　俊恵法師
春といへは霞にけりなきのうまて浪まにみへし淡路嶌山
右　　道因法師
いつとても身のうきことはかはらねとむかしは老をなけきやはせし
左　　西行法師
ふりつみし高ねのみゆきとけにけり清たき川の水のしら波
右　　僧正慈円
龍田山秋行人の袖をみよ木ゝのこすえは時雨さりけり
左　　二品法親王守覚
なからへて世にすむへくはなけれともうきにかへたる命なりけり
右　　法橋顕昭
はきか花真袖にかけて高まとの尾上の宮にひれふるやたれ
左　　寂蓮法師
さひしさはその色としもなかりけり木たつ山の秋の夕暮
右　　寂然法師
秋はきぬとしも半に過ぬとやおきふく風のおとろかすらん
左　　僧正行意
やましろのときはの森の夕しくれそめぬみとりに秋そ暮ぬる
右　　明恵上人
夢の世のうつゝなりせはいかゝせんさむへきほとをまたはこそあれ

以上、その詠人は、達磨和尚から明恵上人までの仏教の先徳三十六人である。『釈教歌仙』と呼ばれる異種三十六歌仙と同一の人撰で、金光本の「栄海撰」という撰者表記とも一致する。

栄海撰の『釈教歌仙』は、『新編国歌大観』に、「釈教三十六人歌合」という名で収録されており、その解題に井上宗雄氏らによる諸本分類が示されている。諸本は聖徳太子歌を第二首に有するか否かで二系統に分けられ、うち、第二系統については、

二、達磨の歌の次に聖徳太子の肖像と、その歌として、二しなてるやかた岡山のいひにうゑてふせる旅人あはれおやなしがあり、貞慶の歌のない本がある。板本（「寛文元辛丑暦季秋　林和泉掾板行」の刊記がある）・内閣文庫本（二〇一・三七七）等がそれである。書陵部「待需抄」所収本・北駕文庫本等には左右付がある。この類の伝本も多い。

とされる。この井上氏の分類において、金光本所収の「三十六人

歌合」は言及されていないが、聖徳太子歌を有し、貞慶を欠く点が第二系統と共通する。

三　「三十六人哥合僧栄海撰」と『釈教歌仙』

『釈教歌仙』第二系統の諸本は、約二十本[4]現存が確認できるが、最も古く現存数が多いものが、寛文元年（一六六一）に京の書肆、林和泉掾より刊行された『釈教歌仙』である。東京都立中央図書館加賀文庫所蔵『釈教歌仙』［加 7038］をはじめ、十六本ほど現存する。幾度も版を重ね、『釈教歌仙』諸本のなかで、近世初期から末期に至るまでの間、最も流布していた。林版（杉浦丘園氏旧蔵）と金光本所収の「三十六人歌合僧栄海撰」を比較すると、題の相違、序・左右の有無、撰歌などの点で異なり、同一和歌においても異同がみられる。

以下、林版と金光本の相違点を確認する。まず、題に関しては、林版では外題が刷題簽で「釈教歌仙」とあり、序文の冒頭には「釈教三十六人歌仙図　勧修寺僧正栄海撰」とあるのに対し、金光本は内題に「三十六人歌合僧栄海撰」と記される。[5] また、林版は歌仙に左右を付さないが、金光本は「歌合」とあるように、左右が付され、歌合の形式となっている。金光本の歌仙の配列は林版と同一であるが奇数の和歌を左方に、偶数を右方に配し、左右交互に十八番三十六首で構成される。なお、林版には左右は付されていないものの前号掲載の拙稿[6]において林版の歌仙絵が第一系統の佐佐木家旧蔵本を典拠としつつも、その左向性を排し、奇数首と偶数首が向き合う形式に改められていることを指摘した。同時代に歌合形式が意識されていることは興味深い。また、林版が有する栄海の序文は、金光本にはみられない。

最も大きな相違点は、六首の異なる撰歌がみられることであろう。聖徳太子・貞慶歌の有無の問題を除くと、林版をはじめ『釈教歌仙』の七十本近い諸本の共通する三十六人の人撰に対して、撰歌に相違がみられるものは珍しい。次に、その六首を示す。金光本を［金］、林版（杉浦丘園氏旧蔵）を［杉］と略し、和歌の配列順は、聖徳太子歌を第二首目に有する第二系統に従う。また、和歌本文の下の括弧内に勅撰集所収歌の『新編国歌大観』番号を付した。

第十四番歌　素性法師

［金］我のみやあはれとおもはんきり〳〵すなく夕かけの大和なてしこ

（『古今和歌集』巻四　秋上【二四四】）

［杉］いまこむといひしはかりに長月（ながつき）の有明の月をまちいてつる哉

（『古今和歌集』巻十四　恋歌四【六九一】）

第二十番歌　恵慶法師

［金］天のはら空さへさえやわたるらむ氷とみゆる冬の夜の

月

（『拾遺和歌集』巻四　冬【二四二】）

［杉］八重葎しけれるやとのさひしきに人こそみえね秋は来にけり

（『拾遺和歌集』巻三　秋【一四〇】）

第二十二番歌　良暹法師

［金］たつねつる花と我身もおとろへて後のはるともえこそ契らね

（『新古今和歌集』巻二　春下【一五三】）

［杉］さひしさにやとをたち出てなかむれはいつくもおなし秋のゆふ暮

（『後拾遺和歌集』巻四　秋上【三三三】）

第二十八番歌　道因法師

［金］いつとても身のうきことはかはらねとむかしは老をなけきやはせし

（『千載和歌集』巻十七　雑歌中【一〇八〇一】）

［杉］思ひわひさてもいのちはある物をうきにたへぬはなみた也けり

（『千載和歌集』巻十三恋三【八一八】）

第三十番歌　僧正慈円

［金］龍田山秋行人の袖をみよ木丶のこすえは時雨さりけり

（『新古今和歌集』巻十　羈旅歌【九八四】）

［杉］おほけなくうき世の民におほふかなわかたつ杣にすみそめのそて

（『千載和歌集』巻十七雑中【一一三七】）

第三十二番歌　法橋顕昭

［金］はきか花真袖にかけて高まとの尾上の宮にひれふるやたれ

（『新古今和歌集』巻四　秋上【三三二】）

［杉］水くきの岡の葛葉も色つきてけさうらかなし秋のはつかせ

（『新古今和歌集』巻四　秋上【二九六】）

以上が金光本独自の六首である。現存する『釈教歌仙』諸本において、金光本が有する六首と同一の和歌を有する本文はみられない。

この採歌された六首の特徴を考える。まず、その典拠を確認すると、他の『釈教歌仙』諸本と同様、皆勅撰集入集和歌から撰ばれている。ただし、僧正慈円和歌に関して、以下の点で撰者栄海の編纂基準と、金光本の撰歌に一部違いが生じていると考えられる。土屋貴裕氏らによって[7]南北朝期の東京国立博物館所蔵佐佐木家旧蔵『釈教三十六歌仙絵巻』等、歌仙絵を有する諸本の歌仙絵

が、『時代不同歌合』に由来することが指摘されている。和歌に関しても同様の指摘ができるが、金光本に関しては、僧正慈円の「龍田山」歌が『時代不同歌合』にみられない為、編纂方針が南北朝期の佐佐木家旧蔵本絵巻と合わないのである。そのため、栄海以外の人物によって手が加えられた可能性が考えられる。

この「龍田山」歌は『新古今和歌集』のほか、『元久詩歌合』【一三五】、『拾玉集』【四〇七四】、『歌枕名寄』【一三九三】に採られている。また、金光本書写者の長流の故郷が一説には、龍田であるとされることを思い合わせると、あるいは、書写の際に、長流が自身の好みに合わせて撰歌を一部変更した可能性もあるのではないか。[8] 長流は『晩花和歌集』下巻において、

つひにわが着ても帰らぬ唐錦龍田の里やなにのふるさとの山

と詠じており、龍田への思い入れが強かった。他、顕昭歌「はきか花」が、『万葉集』巻二十【四三一五】家持歌「宮人の袖付け衣秋萩ににほひよろしき高円の宮」を本歌としており、『万葉集管見』『万葉集鈔』『万葉集名寄』『万葉古事弁詞』等の著作の残る長流の好みにも合った撰歌といえようか。家持の本歌に関しては、『万葉集管見』第二十巻、『万葉集名寄』上之一などに長流の注釈が載る。[9]

四　長流周辺の『釈教歌仙』諸本

では、現存諸本で最も金光本に近い本文を有する『釈教歌仙』はどのようなものであったのか。前述の井上氏の諸本分類では『釈教歌仙』諸本を聖徳太子歌の有無で二分し、聖徳太子歌を有する本文は第二系統とされている。ただ、第二系統の林和泉掾版は第一系統の佐佐木家旧蔵本をもととしており、語句の異同を含め、両系統は密接にかかわりあっていた。よって第一系統も含め、本文を検討する。諸本は聖徳太子歌の有無を除くと、題が「釈教」であるか「釈門」であるかによって、本文に異同がみられる。第一系統の早稲田大学『釈教三十六人歌仙図』（『新編国歌大観』底本）、宮内庁書陵部『数量和歌集』所収「釈門歌仙」を比較すると、金光本は早稲田大学本に近い本文を有していることが確認出来る。第三首の僧正菩提歌、第六首の弘法大師歌、第十首の玄賓僧都歌などの本文が、『数量和歌集』ではなく早稲田大学本の本文と一致する。三十六首目の明恵／高弁上人歌を一例として挙げる。なお、異同箇所に付した傍線は稿者による。

［早稲田大学『釈教三十六人歌仙図』］

明恵上人

夢の世のうつつなりせはいかゝせむさむへきほとを待はこそあれ

［宮内庁書陵部「釈門歌仙」『数量和歌集』］

高弁上人

夢のよの現なりせはいか、せんさめゆく程をまてはこそあれ

［金光図書館『哥書』］

右　明恵上人

夢の世のうつゝなりせはいかゝせんさむへきほとをまたはこそあれ

早稲田大学本は佐佐木家旧蔵本の完本を模写したものである。佐佐木家旧蔵本は、前述のように寛文元年に林和泉掾より刊行された『釈教歌仙』のもととなった。林版は、長流が「長流」と名乗るようになった寛文年間以降には、最も手に入れやすかった本文といえる。

そしてその「釈教」を題に冠する諸本のなかでは、聖徳太子歌を有する点で林和泉掾版と最も近い本文となっている。よって金光本の底本も、佐佐木家旧蔵本より派生した諸本であったのであろう。[10]

次に、長流周辺における『釈教歌仙』関連事跡を確認する。すると、長流と親交の深い契沖（一六四〇―一七〇一）自筆本とされる『釈教歌仙』があることがわかる。現在の所蔵先を確認できず、目録の情報のみとなるが、昭和二十五年（一九五〇）の『東京古典会主催即売会目録』には、

【四四七】釋教三十六歌仙　貞享三年、契沖阿闍梨筆　一帖　六〇〇〇圓

と、貞享三年の書写本が載る。この写本は、翌年昭和二十六年六月の『弘文荘待賈古書目』に、

【四〇九】釋教卅六歌仙　釋栄海撰、契沖自筆　貞享三年写　一帖　六五〇〇圓

達磨和尚・聖徳太子より明恵上人に至る歴代の高僧歌僧卅六人を詠じたる古歌を輯む。巻首に長序あり。半紙判、序文九行、本文八行、歌二行書。巻末に

栄海僧正かなせる釈教三十六人
歌仙集を見てその本のまゝを写す
貞享三年秋八月　日　契沖書

とあり。契沖独特の例の草書雅なり。元冊子たりしを今折帖に改む。美本。

と、その詳細が記されている。それによると、序文を有し、第二首目に聖徳太子を有する第二系統であることが推測できる。さらに昭和三十四年（一九五九）七月の『弘文荘待賈古書目』に掲載された際には図版を伴い、その三十三首から三十六首までと、契沖奥書を確認できる。図版部分を翻刻すると、

寂蓮法師　さひしさはその色としもなかりけり真木たつ山のあきの夕くれ
寂然法師　秋はきぬとしもなかはにすきぬとやをきふく風のおとろかすらん
僧正行意　山しろのときはのもりの夕しくれそめぬみとりに秋そくれぬる
明恵上人　夢の世のうつゝなりせはいかゝせむさむへきほとをまてはこそあれ

栄海僧正かなせる釈教三十六人
歌仙集を見てその本のまゝを写す
貞享三年秋八月　日　契沖書

とある。三十五首目に貞慶上人がないため、この図版からも聖徳太子歌を第二首に有する系統であることがわかる。そして、明恵上人歌を前述の諸本比較と照らし合わせると、「明恵上人」「さむへきほと」とあることから、その和歌本文が佐佐木家旧蔵本系の完本に近いことが推測できよう。なお、歌仙に左右はふられてはいない。以上、金光本とは、貞慶の和歌がなく、聖徳太子を有し、佐佐木家旧蔵本系統の本文である点が一致し、一方、序文を有し、左右を付さない点が異なっている。金光本独自の和歌六首箇所の契沖本に関しては、契沖書写本は目録に画像がなく、確認できていない。

また、奥書には「その本のまゝを写す」とある点に注目したい。林版（杉浦丘園氏旧蔵）の三十三首から三十六首までの本文を示すと、[11]

寂蓮法師
さひしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮
寂然法師
秋はきぬとしもなかはにすきぬとや荻ふく風のおとろかすらん
僧正 行意
山しろのときはのもりの夕しくれそめぬみとりに秋そくれぬる
明恵上人
夢の世のうつゝなりせはいかゝせんさむへきほとをまたはこそあれ

とあり、漢字と仮名の配分が契沖写本とほぼ一致する。また、傍線箇所は、『釈教歌仙』諸本において異同がみられる箇所であるが、これらも契沖写本と林版では同じ本文となっている。よって、契沖の書写した「栄海僧正かなせる釈教三十六人歌仙集」は、林和泉掾版か、もしくはその元となった系統の写本であると思われる。契沖が『釋教三十六歌仙』を書写した時期は、長流の亡くなった二か月後であり、金光本より後の書写本となるが、長

流もまた、寛文元年刊行本の林版本文を確認出来る環境であったことが、この契沖本からも推測できる。

五　金光本所収各種「三十六哥合」について

次に金光本所収のほかの歌仙の特徴を簡単にまとめる。金光本所収の四種の三十六歌仙は、皆一歌仙一首計三十六首で構成されているが、「中古三十六人哥合」を除く、「三十六人哥合公任卿撰」「女房三十六人哥合」の撰歌が「三十六人哥合僧栄海撰」同様、きわめて珍しい。

公任撰の三十六歌仙に関しては、新藤協三氏によって[12]、

（一）佐竹本型　佐竹本三十六歌仙絵に所載される三六首
（二）尊円本型　高田本『詩歌抜書』によって判明する三六首
（三）行俊本型　（二）尊円本型に付された傍書によって判明する三六首
（四）松花堂本型　『歌仙拾穂抄』に掲げる、近衛龍山から松花堂昭乗に伝襲された本文。『歌仙拾穂抄』とは一五首が異なる。
（五）拾穂抄型　北村季吟『歌仙拾穂抄』に採択された三六首
（六）歌仙抄型　下河辺長流『歌仙抄』に採択された三六首。『歌仙拾穂抄』とは一一首が異なる。

という六種の分類区分が提示されている。ただし、この六種のみではなく、陽明文庫所蔵の『和歌群玉抄』［近・218―27］に収録された十二通の一首本『三十六人歌仙』すべてが新藤氏の六種の分類にあわない。木下長嘯子による歌仙堂「三十六歌仙[13]」なども、この六種にはおさまらない独自の撰歌であるなど、和歌に出入が多い[14]。このように、三十六人の人撰は同じでも、その撰歌が多様であることは、『百人一首』の異本の少なさと比べて、特徴的である。金光本もまた、この新藤氏の六種の分類のいずれにもあてはまらない。

ただし、金光本の撰歌は一首本系統の内では独自の撰歌ではあるが、一歌仙複数首の広本系の三十六歌仙の和歌の内から撰ばれており、広本系を逸脱するものではない。広本は堂上歌人の手によって書写されていた。承応二年（一六五三）に飛鳥井雅章によって編纂された『数量和歌集[15]』所収「歌仙」は、いわゆる広本系とされる[16]、公任撰の百五十首に俊成本の和歌などを合わせた約二百首の撰歌を有する。東北大学図書館狩野文庫所蔵の三室戸誠光筆『以類集』［4-28233-2］なども広本を所収する。つまり、長流が金光本に収録した「三十六人哥合」は、当時の堂上歌壇で盛んに用いられていた系統の本文から、一歌仙一首抜き出したものであり、堂上歌壇の影響がうかがえるのである。

一方、同じく独自撰歌がみられる「女房三十六人哥合」に関し

ては、十七世紀に書写、あるいは刊行された「女房三十六人哥合」諸本が、「応安六年長月上旬」の本奥書を有する三首本に所収された和歌をもととするものが主流であるのに対して、そこに所収されていない和歌を三十六首のうち一首有している。[17] なお、大伏春美氏の「女房三十六人歌合」の分類によると、[18]「応安六年長月上旬」の本奥書を有する系統は、一類本、その略本系統が四～七類としてまとめられている。金光本は以上の分類には当てはまらず、残る二類、三類に関しても金光本の三十六首がすべて収録された系統はない。『日本歌学大系』別巻六所収の[19]各種女歌仙に関しても同様である。以上、金光本は撰歌に注目すると、特殊な本文を有した歌書であることが、「三十六人哥合僧栄海撰」以外の三十六人歌合からも看取できよう。

金光本のように、「釈教歌仙」を含む、複数の三十六歌仙を収録した歌集は多く現存する。金光本同様十七世紀後半に編纂あるいは書写されたことが確認できる作品は、承応二年（一六五三）九月、飛鳥井雅章編纂の宮内庁書陵部蔵『数量和歌集』[210.716]、万治三年（一六六〇）頃の飛鳥井雅章自筆本と考えられる宮内庁書陵部御歌所本『歌書集成』[155.109]、天和二年（一六八二）風早公前[20]書写の内閣文庫『百人一首始風早公前卿書集』[201-390]、元禄十二年（一六九九）石井行豊が編纂した宮内庁書陵部蔵『待需抄』[266.4]などがある。雅章の『歌書集成』と金光本を比較すると、『釈教歌仙』を除く三種の三十六歌仙が同じ人撰で、『釈教歌仙』を含め収録する各種三十六歌仙が皆左右を付した歌合形式に採る点が共通する。なお、『歌書集成』には金光本のような独自撰歌はない。『釈教歌仙』に関しても、堂上歌人の諸本において聖徳太子歌を挿入する本文は少ない。この点に関して金光本は堂上歌壇の歌集とは異なり、一般に流布していた林和泉掾版『釈教歌仙』に近い撰歌を有する。そしてその書肆、林和泉掾より、『歌仙』『中古歌仙』『続女歌仙』『新女歌仙』も寛文年間以降順次出版されている。金光本はそれら林版各種歌仙と比較しても、『中古歌仙』を除く二種が同一人撰で、一部の撰歌が異なっている。堂上、町版含め、十七世紀後半までに書写刊行された諸本のなかで、金光本は極めて独自な撰歌を有するのである。

まとめ

金光図書館神徳書院文庫所蔵の下河辺長流自筆『哥書』は、数種の三十六歌仙や時代不同歌合といった、名数秀歌撰を収録した歌書である。そのうち、「三十六人哥合僧栄海撰」は、町版では『釈教歌仙』として出版され、堂上歌人の歌書においては「釈門歌仙」として所収されている異種三十六歌仙である。その三十六人の配列、人撰は寛文元年に林和泉掾より刊行された『釈教歌仙』と同じであるが、撰歌が六首異なっている。そして、その六首を有する諸本は、現存する約七十本の『釈教歌仙』諸本において、この金光本のみであり他に類例をみない。また、金光本所収

「三十六人哥合公任卿撰」および「女房三十六人哥合」もまた、珍しい撰歌となっている。このように、所収歌には独自性がみられるが、異種三十六歌仙を複数収録する歌集は、飛鳥井雅章の『数量和歌集』『歌書集成』など、堂上歌人の手によって多く編纂されていた。また、金光本の「三十六人哥合公任卿撰」は、堂上歌人の編纂した歌集に多く収録されていた広本系をもととしており、堂上の影響もうかがえるのである。

付記

貴重な蔵書の閲覧、翻刻の掲載をご許可くださいました金光図書館長　金光英子様に心から御礼申し上げます。

註

（1）駒澤大学図書館貴重書『晩花集』[911.15/75]

（2）『森銑三著作集』二　中央公論社　一九七一年

（3）佐佐木信綱編『契沖全集』一一長流全集　朝日新聞社　一九二七年

（4）〈版本〉林和泉掾版『釈教歌仙』寛文元年刊

岡山大学附属図書館池田家文庫『釈教歌仙』[貴911-7-7]

刈谷市中央図書館村上文庫『釈教歌仙』[W 1169]

関西大学図書館『釈教歌仙』[911.247-K 9/7]

宮内庁書陵部『釈教歌仙』（『歌仙部類』[213-35]の内）

国文学研究資料館『釈教歌仙』[貴99-144-7]

国立国会図書館『釈教歌仙』[188-478]

国立国会図書館『釈教歌仙』[127-113]

国立国会図書館『釈教歌仙』[854-204]

神宮文庫林崎文庫『釈教歌仙』[3-637　未見。国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム34-322-2-Cにて確認]

天理大学附属天理図書館『釋教卅六人詞仙』[910.2-1439-89]

天理大学附属天理図書館『釋教卅六人詞仙』[911.24-441]

西尾市岩瀬文庫『釈教歌仙』[86-54]

東京都立中央図書館加賀文庫『釈教歌仙』[加7038]

名古屋市蓬左文庫蟹江慶次郎旧蔵書『釈教歌仙』[蟹173]

杉浦丘園旧蔵『釈教歌仙』（架蔵）

〈写本〉

宮内庁書陵部「釈教三十六人哥」『待需抄』第四[266.4　国文研 A 25]

東北大学附属図書館狩野文庫『釋教三十六人詞仙』[2-2711-1]（寛文元年林和泉掾版の写し）

東北大学附属図書館『釈教三拾六人歌仙并序』[丁 B/ 1

-2, 4/63]
北海学園大学附属図書館北駕文庫「釈門三十六歌仙」
『歌仙和歌集』[文—536　国文研 C 1529]
龍谷大学図書館写字台文庫「釈門歌仙」『数量和歌集』
[911.208-54-2]
所蔵者不明「釋教三十六歌仙」『弘文荘売買古書目』
宮城県立図書館伊達文庫『釋教三十六人歌合』[伊 911.25
-46]

(5)「釈教」という表現を用いない諸本としては「釈門歌仙」(宮内庁書陵部『数量和歌集』[210.716])、「僧三十六人歌仙」(彰考館『僧三十六人歌仙』[巳—拾七　国文研 C 492])などの用例があるものの、「三十六人歌合」のみという、異種三十六人歌仙であることを題に明記しない諸本は金光本の他には確認できない。

(6) 拙稿「林和泉掾版『釈教歌仙』について」『論究日本文学』九七　二〇一二年

(7) 土屋貴裕「「釈教三十六歌仙絵」と真言僧栄海」『東海仏教』五二　二〇〇七年

(8) あるいは大和国宇陀ともされる。

(9)『万葉集管見』第二十
宮人の袖つき衣秋はきに
袖つきは継心にいへる説、僻こと也。袖著衣也。ものにつく心地。こゝによめるは秋はきの花の色にすりつきたる衣の心也。

(10) 相違点もある。第二十番能因法師歌(聖徳太子歌を有す諸本では第二十一番歌)で、早大本は、
夕去はしほ風こしてみちのくの野田の玉河かはつなく也
と、「かはつ」が鳴く。寛文元年林和泉掾版も「かはつ」が鳴くが、金光本では「千鳥」が鳴く。この異同に関しては、金光本所収「時代不同歌合」の能因歌も、
夕されは汐風こしてみちのくの野田の玉河千鳥なく也
と、「千鳥」と記しているため、書写者である長流は「千鳥」とする本文を『釈教歌仙』他系統に依らずとも確認していた。よって金光本の六首の異なる撰歌以外の本文は、佐佐木家旧蔵本をもととしたと考えられよう。

(11) なお、杉浦丘園氏旧蔵本は明恵上人歌の「さむへきほとを」のうち「と」と「を」上部が欠けているため、東京都中央図書館加賀文庫本により補った。

(12) 新藤協三「一首歌仙本『三十六人歌合』の諸形態」『三十六歌仙叢考』新典社　二〇〇四年(初出『調査研究報告』一三　一九九二年)

(13) 木下勝重氏蔵「三十六歌仙」『長嘯子新集』中巻　古典文庫　一九九三年

(14) 堂上作例のみを確認しても、京都大学図書館中院文庫所蔵の中院通茂編『歌仙色紙形』[7/カ/8]は六種の分類にはあてはまらない撰歌であり多様であった。

(15) 宮内庁書陵部『数量和歌集』[210.716] 宝永四年北条氏朝写
東北大学図書館林文庫『数量和歌集』[2603]
(16) 註(12)参照。
(17) 式子内親王「なかむれは」歌。
(18) 大伏春美『女房三十六人歌合の研究』新典社　一九九七年
(19) 久曽神昇編『日本歌学大系』別巻六　風間書房　一九八四年
五三　女三十六人撰〔甲〕
五四　女房三十六人歌合〔乙〕
五五　女房三十六人歌合〔丙〕
五六　女歌仙〔丁〕
五七　続女歌仙〔戊〕
(20) 風早公長(一六六五―一七二三)の前名。天和元年(一六八一)から元禄十一年(一六九八)まで、公前と称す。

(ほんだ・じゅんこ　本学非常勤講師)